

山城高等学校校歌

竹友 藻風 和作
中瀨古 作歌曲

Allegretto

Allegretto *mf*

中瀬吉和作曲

ナーラビガガオのみかね、二カネーナリレテ、ナヒ *mp*

ガカレサヤシケキカツし一ラガきよ、ワラオさ

ムロノサークークー、サカキゼ一二オヨウ、ウキママ

ナビノイエのノトメウトサヨセヘ、

ギシンジツセキニンノイヒ

双ちやう

ケ丘に鐘鳴りて

かづら
深風和作曲

双ヶ丘に鐘鳴りて
流れさやけき桂川
御室のさくら咲き匂ふ
学びの家のたふと

学びの家のたらしや

愛宕の峰に雲晴れて

愛宕の峰に雲晴れて

命みなぎるわれら山城

命みなぎるわれ

- 2 -

日かげさしそふ西の京
嵯峨野さがのをわたる風清き
学びの園のめでたさ上
平和 協力 友愛の
光あまねきわれら山城

うぞ変らぬ御援助を賜りますよう伏してお願い申上げ式辞といたします。

昭和三十八年十一月二十九日

滋賀女子高等学校校長 中野富美

学校新聞 鶴ヶ丘校舎の建設を契機として、第一期工事の校舎の創刊 完成も間近い昭和三七年一月一〇日、タブロイド判の学校新聞『すみれ』が純美礼会第一部文芸班の編集により創刊された。

本学園にはさきに同窓会誌『純美禮』が昭和一三年と二九年の二回発行されたが、その後年久しくして、卒業生からもこの種の学園通信の発行が待望されていた。松村信蔵理事は「発刊に寄せて」と題して次のように述べている。

この家庭への連絡や、生徒の皆さんのが学習の反省に資し、外には卒業生諸姉に対し学園の歩みをお知らせする同窓会報の役割りをも果たすこの学園新聞の発刊こそ多年の宿願でありました。しかし、年々入学生徒数の増加に先生方は日課に没頭されていて、とても手が廻りかねていたところ皆さんから会報に纏めるまでに折々学校の様子を知りたいから学園レポートようのものでも作られたいとの熱心なこ要望があり漸く伸びゆく学園の現状をお知らせできる機会を得てまことにうしいかぎりであります。

創刊号は四頁でその内容は、校長の「挨拶」、松村理事の「発刊

に寄せて」と題して新校舎建設の経過報告、大塚甚三郎PTA会長の「あいさつ」、「新校舎建設について各位へ感謝」(中野理事長校長)、「校舎建築計画」、「新校舎と調理室」(山野穂子教諭)、「日に日にあらたに」(別所孝太郎学監)、「女らしい人」(中野校長)、「我が学園の特色と誇り」(松村花副校長)、「交通規則を守りましょう」、「南国旅行の思い出」、「待望の新校歌生まれる」、「手芸のすすめ」、「編物講習を受けて」、「私の高校生活」、「昭和三十八年度第一学年入学志願者募集」等である。

第二号は「鶴ヶ丘校舎竣工式記念号」で竣工式の行われた昭和三八年一一月一九日に発行され、この年度から年二回の発行となり、三九年度からは生徒会発足により生徒会新聞班が編集発行を担当し、その後年発行回数に増減があつたが最近は七月と三月の一回に定着している。現在まで六四回発行されている(平成二年三月現在)。なお、四一年度から新聞の名称『すみれ』を『滋賀女子高新聞』に改称した。後に述べるように、三九年に同窓会報『すみれ』が創刊され、紛らわしくなったためである。

新校歌 昭和三八年一一月二九日の鶴ヶ丘校舎並びに講堂兼体育館竣工式で新校歌が歌われ、一一月三〇日のPTA総会、一二月一日の同窓会総会で一般に披露された。この新しい校歌は、新校舎の完成を記念して作られたもので、歌詞はすでに昭和三七年一一月一〇日付の学校新聞『すみれ』創刊号に発表され、作曲は依頼中である旨記されている。また、翌三八年三月一七日の卒業式の「しおり」にもこの歌詞が掲載されているところみると、曲はすでに出来、当日歌われたものと思われる。

作詞者は本校の国語担当の寺脇房市教諭、作曲者は同志社女子大学の中瀬古和教授である。竣工式当日発行された学校新聞第二号から作詞者と作曲者の言葉を校歌とともに転載する。

校歌作曲について 同志社女子大学教授

中瀬古 和

表現内容ははつきりしているのに、音楽としてそれを捉えようとすると、それがさまざまの異なる姿として現れ、その内の決定的な一つを握るまでにいくらかの廻り道をすることがあります。例えばごく自然に二拍子として書き始めたのに、行き詰まってしまう。さらに苦心を重ねていると、ふいに全く違った三拍子の音楽が湧いて来てその表現を成功させる。そういうことがあります。始めの形に手を加えて最終的なものになるのなら当然ですが、同じことを同じ人が変わそうとするのに、なぜすつかり違った可能性があつたのかと、我れながら驚くのです。

滋賀女子高等学校校歌の場合もそうでした。歌詞からにじみ出るほのぼのとしたものそして高い願望は始めからはつきりしているのに、音楽として最終的な形が出来上がるまでには、すっかり別な旋律の袋小路に入りこんでしまってどう手を加えても気に入らない時期が暫く続きました。比較的長い歌詞をどうまとめるかということも、また一つの問題でした。日本語には三音節以上の言葉が多いので、一音や二音では一つの言葉を表わせないので、読む場合には長いと感じなくとも、歌にすると冗漫になりやすいのです。

苦心しただけに愛着も深く新校舎竣工のお喜びの日に、この校歌が披露されることを光栄に思います。



学校新聞「すみれ」創刊号
(昭和37年11月10日)

校歌

作詞 寺脇房市
作曲 中瀬古和女のまさ道修めなん。
久遠の理想掲ぐため日本少女子ひたすらに
はぐくみの庭ぞこゝ紺碧に澄む琵琶の湖
愛の光を溢ふれける

妙なる風情称えつ

学びの業にいそまん

新たな文化造るため

日本少女子ひとすじに
ああ、かぐわしき我が学び舎日本少女子ひたすらに
はぐくみの庭ぞこゝ

滋賀女子高等学校々歌

寺脇房市作詞
中瀬古和作曲

生徒数の推移（五月一日現在）

年度	年 度			本 科
	一 年	二 年	三 年	
				專攻科
四〇	三九	三八	三七	三六
四一	四〇	三九	三八	三七
四二	四一	四〇	三九	三八
四三	四二	四一	三八	三七
四四	四三	四二	三七	三六
四五	四四	四三	三六	三五
四六	四五	四四	三五	三四
四七	四六	四五	三四	三三
四八	四七	四六	三三	三二
四九	四八	四七	三二	三一
五〇	四九	四八	三一	三〇
五一	五〇	四九	三〇	二九
五二	五一	五〇	二九	二八
五三	五二	五一	二八	二七
五四	五三	五二	二七	二六
五五	五四	五三	二六	二五
五六	五五	五四	二五	二四
五六	五六	五五	二四	二三
五七	五六	五五	二三	二二
五八	五七	五五	二二	二一
五九	五八	五五	二一	二〇
六〇	五九	五五	二〇	一九
六一	六〇	五五	一九	一八
六二	六一	五五	一八	一七
六三	六二	五五	一七	一六
六四	六三	五五	一六	一五
六五	六四	五五	一五	一四
六六	六五	五五	一四	一三
六七	六六	五五	一三	一二
六八	六七	五五	一二	一一
六九	六八	五五	一一	一〇
七〇	六九	五五	一〇	九
七一	七〇	五五	九	八
七二	七一	五五	八	七
七三	七二	五五	七	六
七四	七三	五五	六	五
七五	七四	五五	五	四
七六	七五	五五	四	三
七七	七六	五五	三	二
七八	七七	五五	二	一
七九	七八	五五	一	〇
八〇	七九	五五	〇	一
八一	八〇	五五	一	二
八二	八一	五五	二	三
八三	八二	五五	三	四
八四	八三	五五	四	五
八五	八四	五五	五	六
八六	八五	五五	六	七
八七	八六	五五	七	八
八八	八七	五五	八	九
八九	八八	五五	九	一〇
九〇	八九	五五	一〇	一一
九一	九〇	五五	一一	一二
九二	九一	五五	一二	一三
九三	九二	五五	一三	一四
九四	九三	五五	一四	一五
九五	九四	五五	一五	一六
九六	九五	五五	一六	一七
九七	九六	五五	一七	一八
九八	九七	五五	一八	一九
九九	九八	五五	一九	二〇
一〇〇	九九	五五	二〇	二一

教職員数の推移（五月一日現在）

年度	年 度			計
	一 年	二 年	三 年	
				學級數
四〇	三九	三八	三七	三六
四一	四〇	三九	三八	三七
四二	四一	四〇	三九	三八
四三	四二	四一	三九	三七
四四	四三	四二	三九	三六
四五	四四	四三	三八	三五
四五	四五	四三	三七	三四
四六	四五	四三	三六	三三
四七	四五	四三	三五	三二
四八	四五	四三	三四	三一
四九	四五	四三	三三	三〇
五〇	四五	四三	三二	二九
五一	五〇	四三	三一	二八
五二	五一	四三	三〇	二七
五三	五二	四三	二九	二六
五四	五三	四三	二八	二五
五四	五四	四三	二七	二四
五六	五四	四三	二六	二三
五七	五六	四三	二五	二二
五八	五七	四三	二四	二一
五九	五八	四三	二三	二〇
六〇	五九	四三	二二	一九
六一	六〇	四三	二一	一八
六二	六一	四三	二〇	一七
六三	六二	四三	一九	一六
六四	六三	四三	一八	一五
六五	六四	四三	一七	一四
六六	六五	四三	一六	一三
六七	六六	四三	一五	一二
六八	六七	四三	一四	一一
六九	六八	四三	一三	一〇
七〇	六九	四三	一二	九
七一	七〇	四三	一一	八
七二	七一	四三	一〇	七
七三	七二	四三	九	六
七四	七三	四三	八	五
七五	七四	四三	七	四
七六	七五	四三	六	三
七七	七六	四三	五	二
七八	七七	四三	四	一
七九	七八	四三	三	一
八〇	七九	四三	二	一
八一	八〇	四三	一	一
八二	八一	四三	一	一
八三	八二	四三	一	一
八四	八三	四三	一	一
八五	八四	四三	一	一
八六	八五	四三	一	一
八七	八六	四三	一	一
八八	八七	四三	一	一
八九	八八	四三	一	一
九〇	八九	四三	一	一
九一	九〇	四三	一	一
九二	九一	四三	一	一
九三	九二	四三	一	一
九四	九三	四三	一	一
九五	九四	四三	一	一
九六	九五	四三	一	一
九七	九六	四三	一	一
九八	九七	四三	一	一
九九	九八	四三	一	一
一〇〇	九九	四三	一	一

校章・校章解説



「滋賀女子高等学校」ならびに「純美禮学園」の2つの頭文字の「S」と旧滋賀県章の六角形とを組み合わせて図案化し、その中央に「高」の文字を配したもので、これを純真、清楚の意をもつ白色とし、地色は希望と明快、平和の象徴である金茶色の七宝にしてある。

新校章の制定は昭和36年4月旧校名、大津家庭高等学校を「滋賀女子高等学校」と改名したときに行われた。

校 歌

J=88

1. こんべ
2. きにすおゆる
3. にはゆる

やようらんのにわぞここ 滋賀女子高
やはぐくみのにわぞここ 滋賀女子高
やつちかいのにわぞここ 滋賀女子高

I こんべき
紺碧に澄む琵琶の湖
愛の光ぞ溢れる
妙なる風情称えつつ
学びの業にいそしまん
新たな文化造るため
やまとおとめこ 日本少女子ひとすじに
ああかぐわしき我が学び舎
ようらん 插籃の庭ぞここ
滋賀女子高校

II しづきにお
紫匂う比良 比叡
あふ 智恵の光ぞ輝ける
えん 娟なる景色頌しつつ
わざ 学びの業にいそしまん
おんな 女のまさ道修めなん
くおん 久遠の理想掲ぐため
やまとおとめこ 日本少女子ひたすらに
ああいつくしき我が学び舎
はぐくみの庭ぞここ
滋賀女子高校

III みどりはすみれその
翠に映ゆる純美禮の園
たま 霞の光ぞ満ちにける
はは 栄えある誉れかざしつつ
ぬか ふしき婦徳履みゆかん
平和の世界築くため
やまとおとめこ 日本少女子もろともに
ああうるわしき我が学び舎
つらか 培いの庭ぞここ
滋賀女子高校

dim. *mf* *f* *f*

んか つくるためやまとおとめごひとすじに ああかぐわしきわがまなび
そう かかくためやまとおとめごひたすらに ああいつくしきわがまなび
かい さづくためやまとおとめごもろともに ああうるわしきわがまなび

1. 2 3

やようらんのにわぞここ 滋賀女子高
やはぐくみのにわぞここ 滋賀女子高
やつちかいのにわぞここ 滋賀女子高

寺脇房市作詞
中瀬古和作曲